

# アメリカの環境主義と環境的想像力

藤 江 啓 子

## はじめに

近年の環境問題の深刻化に伴い、アメリカでは環境保護をテーマにした著作活動が盛んになってきている。いわゆるネイチャーライティングと呼ばれ自然保護をテーマとした著作のジャンルが確立しているが、その他、都市を舞台にしたものや有毒物質の問題を取り上げたものもある。純粋に文学と言えるものもあれば、エッセイもある。また、クリエイティヴ・ノンフィクションといった創作とエッセイが一つになった作品も出現している。ここで筆者が環境的想像力というのは、そうした環境保護の立場にたった著作を包括するからである。また環境的想像力という言葉がローレンス・ビュエルの大著『The Environmental Imagination』からきていることも事実である。いずれにしても、それらの著作はしばしば環境主義の表現となり、また環境保護運動の思想的根拠となっている。本稿はアメリカにおける環境主義と環境的想像力の関係を歴史的に考察することを目的とする。

## 原点（エマソンとソロー）

アメリカで最初に自然保護の声をあげ、自然保護の基本思想を築いたのはラルフ・ウォルドー・エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882年）とヘン

リー・デイヴィット・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862 年) であるといっても過言ではない。当時のアメリカは西部開拓の時代であり、森林伐採は至上命令であった。開拓者にとって、自然は闘う対象であり、破壊し、切り開くべきものであった。バッファローを殺戮し、先住民であるインディアンを迫害し、開拓を続けることが、文明化であり、また神より与えられた使命であると考えられていた。「荒野への使命」「明白なる神意」といった使命感に基づいた領土拡大のなかで、暗黒の原生林に光をあてることが文明化であり、善であると考えられていた。先住民であるインディアンは悪魔の子供と呼ばれ、彼らを迫害することは悪魔を退治することであり、野蛮人である彼らを撲滅することは文明化の推進であるとされていた。

こうした初期アメリカのピューリタンの信念に疑問を抱き、メスをいれたのが、エマソンとソローであった。二人ともハーバード大学を卒業した知識人であり、卒業後はボストンの西北約 30 キロのところにある人口約 200 のコンコード村で過ごした。そこは丘や湖、川、森、牧草地があり、時代をリードした超越主義 (トランセンデンタリズム) と呼ばれる文学思想活動の中心地であった。超越主義という言葉は元来カント哲学に由来するもので、「直観を尊重し、…直観のほうに経験にまさるあらゆる権威を与えようとする傾向」<sup>1)</sup>とエマソンは「超越論者」で定義している。また彼は 1836 年には『自然』(Nature) と題するエッセイを出版し、自然の偉大さと神秘性を詩的な美しい文章で語った。例えば次のような一節が有名である。

In the woods, too, a man casts off his years, as the snake his slough, and at what period soever of life is always a child. In the woods is perpetual youth. Within these plantations of God, a decorum and sanctity reign, a perennial festival is dressed... Standing on the bare ground—my head bathed by the blithe air and uplifted into infinite space—all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God. (p. 6)

（森のなかでも，人間は蛇が皮を脱ぐように自分の年齢を脱ぎ捨て，たとえ人生のどの時期にいても，いつも子供だ。森のなかには永遠の若さがある。こうした神の植林地では，礼儀と高潔さが支配し，永久の祭りが開かれる。…はだかの大地に立ち——頭を快活な空気に洗われ無限の空間へともたげると，——あらゆる卑しい自己本位は消える。私は透明な眼球になる。私は無。私はすべてを見る。普遍者の流れが私のなかをめぐり，私は神の眼目だ。）

ここで語られるのは自己本位（エゴ）を放棄したときに達成できる完全な無の境地であり，また，人間と神と自然との一帯感である。エマソンは自らのそうした自然尊重の信念を実行に移し，1844年の秋にはコンコードから2，3キロ離れたウォールデン湖（写真1）周辺の森を破壊から守ろうと，その北岸の一部を購入している。

その土地を借りて，ウォールデン湖のほとりに自らの手で小屋を建て，1845年7月4日，アメリカの独立記念日を期してそこに入居したのがエマソンの後



写真1 ウォールデン湖。筆者撮影。

輩であるソローであった。2年2ヶ月2日にわたるウォールデンの森での独居生活を記録したものが、『ウォールデン：森の生活』（*Walden, or Life in the Woods*）であり、1854年に出版されている。なかでも第一章の「経済」は生活の簡素化の勧めであり、同時代のロマン派詩人、ワーズワス（Wordsworth）が自然愛と共に、「簡素な生活と高邁な思想」を勧めたのに似ている。両者ともに、資本主義的物質文明の反面教師といえる。物を放棄し、根源的な自己を見つめようとする姿勢はエマソンとも共通しており、次のような一節によく表れている。

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived.<sup>2)</sup>

（私が森へ行ったのは思慮深く生き、人生の本質的な事実のみに向かい合い、人生が教えてくれるものを学ばなかったかどうかを見たかったからであり、死ぬときになって、私は生きなかったと発見したくなかったからである。）

ソローはまた市民運動家としても有名で、一市民として人頭税の支払いを拒否することによって政府に反抗した。人頭税とは投票資格として課せられる税金で、当時のマサチューセッツ州では20歳以上のすべての男性に課せられていた。この税金の支払い拒否は、奴隷制を有し、メキシコ戦争を引き起こした政府への抗議のためであった。このため、ソローは投獄されることになるが、投獄の夜、彼の叔母が独断で税金を払ったため、翌朝彼は釈放され、刑務所での生活はわずか一日で終わった。同じ税金でも地域の市民生活を維持するのに不可欠な税金、例えば公道税などは市民の義務としてきちんと支払っていたということである。こうした経緯を彼は「市民の反抗」（“Civil Disobedience”）と題するエッセイに記し、1949年に出版している。この本は『ウォールデン：森の生活』と共に、今日、環境保護運動をはじめとする様々な市民運動にたず

さわる人々の間で読み継がれている。インド独立の父ガンジーは非暴力不服従運動を展開するにあたり、アメリカのマーティン・ルーサー・キング牧師は黒人運動を指導するにあたり、ソローの著作をバイブルとした。また、ベトナム反戦やヒッピーなど様々な抵抗運動・対抗文化の淵源ともなった。そして、80年代以降の世界的エコロジー運動の中で、ウォールデン湖は環境保護運動のメッカとなっている。

ソローは「市民の反抗」において個人の良心がより高い道徳的法則として政府の法律や政策よりも尊重されるべきものであることを明らかにしているが、『ウォールデン：森の生活』でも、「より高い法則」(“Higher Laws”)と題する章で、野蛮や野性の価値を認め、次のように述べている。

As I came home through the woods with my string of fish, trailing my pole, it being now quite dark, I caught a glimpse of a woodchuck stealing across my path, and felt a strange thrill of savage delight, and was strongly tempted to seize and devour him raw ; not that I was hungry then, except for that wildness which he represented. Once or twice, however, while I lived at the pond, I found myself ranging the woods, like a half-starved hound, with a strange abandonment, seeking some kind of venison which I might devour, and no morsel could have been too savage for me. The wildest scenes had become unaccountably familiar. I found in myself, and still find, an instinct toward a higher, or, as it is named, spiritual life, as do most men, and another toward a primitive rank and savage one, and I reverence them both. I love the wild not less than the good. (pp. 140-141)

(私が釣った魚に糸を通し、釣竿を引きずりながら、すっかり暗くなってしまった森を通り抜けて家へ帰っていたところ、一匹のウッドチャックがこっそり道をよこぎるのがちらりと見えた。そして奇妙な野蛮な喜びにぞくぞくするのを感じ、それを捕まえて生のままむさぼり食いたいという誘惑に駆られた。その時、空腹だったわけではないが、それが表す野性に飢

えていたのだった。もっとも、一度か二度、私が湖畔に住んでいた時、餓死しかかった猟犬のように、森をさまよい、奇妙に自暴自棄となり、がつがつ食べるような何か獣の肉を求めたが、あの時だったら、どんな肉も私にとって野蛮すぎて食べないということはなかっただろう。どんなに野性的な光景も私にはどういうわけか親しみ深くなっていた。当時も今もなお、私はたいていの人と同じように、自分の中により高い、あるいは精神的な生活とでも言ってよいものへの本能と、原始的で野卑な本能を持っているが、私はその両方を崇敬している。私は善と同様に野性を愛する。）

ソローは「市民」という精神的な文明生活を志向しながらも、野性の自然が人間に与える本能的な蘇生力と自然の摂理に従って生きることをより高い法則として認識するのである。文明 (civilization) と野蛮 (savage) の相互照射のなかで、あくまで清貧生活を実行するソローは住居についても次のように述べる。

*And if the civilized man's pursuits are no worthier than the savage's, if he is*



写真2 ソローの住んだ家 (レプリカ)。筆者撮影。

*employed the greater part of his life in obtaining gross necessities and comforts merely, why should he have a better dwelling than the former?* (p. 23)

(もし文明人の営みが未開人の営みよりも価値があるわけではなく、もし文明人が人生の大部分を単に生活必需品と快適品を得るのに費やすのであれば、なぜ文明人は未開人よりもよい住居に住まなければならないのだろうか。)

実際、彼の住んだ小屋は実に簡素なものであった(写真2)。アメリカの環境主義の原点ともいえるエマソンとソーローは、自己本位な物質文明に対して疑問を抱き、自然との共生のなかで根源的自我を見つめ直したといえるのである。

### ミューアとレオポルド

エマソンやソーローの主張は当時、東部の知識人にしか通用しなかったが、広くアメリカ国民にエッセイが読まれたのは、次の世代のジョン・ミューア(John Muir, 1838-1914年)であった。彼は自然保護の父と呼ばれ、自然を守り、自然の美しさや尊さを伝えることに生涯を捧げた。ウイスコンシン大学を中退した後、カリフォルニアのヨセミテ渓谷に入り、シエラ・ネバダの山々を歩き、雑誌にシエラ・ネバダの美しさや素晴らしさを伝えるエッセイを投稿し、世に知られるようになった。また、カリフォルニアの原住民やアラスカのエスキモーと交わるなど、自然、あるいは自然とともに暮らす住民との調和ある関係を求めた。このように自ら自然のなかに身を置くとともに、彼は環境保護運動にも力を注いだ。環境保護団体、シエラ・クラブを1892年に創設し、初代会長に就任し、死ぬまで会長を務めている。シエラ・クラブはその後発展し、現在では全米でも屈指の環境保護団体となっている。また、彼を中心としたロビー活動によって、それまでカリフォルニアの州立公園であったヨセミテ渓谷が、1890年に国立公園に指定された。国立公園といえ、それに先立ち1871

年に第18代大統領グラントが「イエローストーン国立公園法」に署名し、世界で初めての国立公園が誕生していた。また東部ではニューヨークにフレデリック・ロウ・オムステッドの設計によりセントラル・パークが1861年に出来た。セントラル・パークはその後アメリカ各地に出来た都市公園のモデルとなったほか、国立公園の利用面での設計の手本となった。功利主義・物質主義的傾向が優勢なアメリカではあるが、自然保護に本格的にのりだしたのもアメリカであったといえよう。

ミューアの具体的活動として有名なのは、ダム建設をめぐるギフォード・ピンショーとの論争である。1908年、サンフランシスコ市が水不足解消のためヨセミテ国立公園内のヘッチヘッチ渓谷にダムを建設するという計画を発表したが、ミューアは自然保護の立場から大反対の運動を起こす。これに対し、「アメリカ森林学の祖」といわれるギフォード・ピンショーは自然は有効利用すべきであるという立場に立ち、ダム建設促進を訴えた。二人の論争は全国規模に広がったが、結果はピンショー側、ダム建設促進派が勝利を収めた。しかし、この後、アメリカの国立公園にはダムが一つもできなくなったことを考えると、ミューアの功績は大きいと言えよう。

ミューアは自然を神の神殿と考え、ダム建設は神殿破壊とみなしたが、著作においても、自然賛美と信仰のむすびつきを描いた。代表作『はじめてのシエラの夏』(*My First Summer in the Sierra*, 1911)では次のような一節がある。

Perhaps almost everybody in the least natural is guarded more than he is ever aware of. All the wilderness seems to be full of tricks and plans to drive and draw us up into God's Light.<sup>3)</sup>

(どんなに自然とはかけ離れている人でも、おそらく気づいている以上に自然から守られているのだ。すべての原生自然は、私たちが神の光に導いてくれる秘訣と意図に満ちているようだ。)

それは魂の喜びだけではなく、五感を解き放ったときに得られる肉体的、感情



的な喜びでもある。山岳地帯で体験した周囲の野生美との一体感からくる喜びの熱は次のような一節に良くあらわれている。

Drinking this champagne water is pure pleasure, so is breathing the living air, and every movement of limbs is pleasure, while the whole body seems to feel beauty when exposed to it as it feels the camp-fire or sunshine, entering not by the eyes alone, but equally through all one's flesh like radiant heat, making a passionate ecstatic pleasure-glow not explainable. (p. 228)

(このシャンペンのような水を飲むのは純粋な喜びであり、新鮮な空気を吸うのも手足の一つ一つの動きも喜びである。体全体は、キャンプファイアや太陽の光を感じるのと同じように、美にさらされると美を感じる。美は目からだけではなく、同様に放射熱のように肉体全体を通して入ってくるのであり、情熱的で恍惚とした喜びは説明出来ないほどである。)

他方、彼は科学的調査を日々実践するという訓練もはじめ、ついには全体主義的な理解のなかで、自然と対峙する自己を見出す。グランド・ノース・ウームのクラーク・グレーシャ山において、彼は次のように自己の姿を描き出している。

In streams of ice, of water, of minerals, of plants, of animals, the tendency is to unification. We at once find ourselves among eternities, infinitudes, and scarce know whether to be happy in the sublime simplicity of radical causes and origins or whether to be sorry on losing the beautiful fragments which we thought perfect and primary absolute units; but as we study and mingle with nature more, the pain caused by the melting of all beauties into one First Beauty disappears, because, after their first baptismal submergence in fountain God, they go again washed and clean into their individualisms, more clearly defined than ever, unified yet separate.<sup>4)</sup>

(水、水、鉱物、植物、動物の流れの中で、傾向は統一化にある。我々は永遠、無限の中に自己を直ちに見出すが、根源的な大義や起源の崇高な単純さのなかで、幸福でいるべきか、あるいは我々が完全で根本的な絶対的な単位だと考えた美しい断片を失って悲しむべきかわからない。しかし我々が研究し自然と交わるほど、すべての美が一つの原初の美に融けることによって起こる苦痛は消える。なぜならば、水源の神によって最初に洗礼を受けた後に、すべての美は再び洗われきれいな個体となる。以前よりもずっと明確で統一されてはいるが分離している。)

この一節はエマソンやソローの自然を前にしての根源的な自己との対峙、あるいは無我の境地と共通するものであり仏教思想や東洋の神秘主義に類似するものとも思われる。トーマス・J・ライアン (Thomas J. Lyon) も「この一節は『無門関』を通過するという伝説的な禅・仏教の話と神秘的な類似がある」<sup>9)</sup>と指摘する。具体的な環境保護運動は自然を前にしての深い自己探求の思想に支えられていたのである。またそれは魂と感情と肉体が自然の複雑さと調和し一体化しようとする試練であり、その後にいる境地である。

自然と人間との関係を深く真摯に見つめ、環境保全の仕事に従事しながら環境倫理について問題提起をしたのが、アルド・レオポルド (Aldo Leopold, 1887-1948年) であった。彼はイエール大学の森林管理学部を卒業後、1909年、合衆国森林管理局の森林警備隊員としての職についた。1933年にはウィスコンシン大学に狩猟鳥獣管理学の教授として迎えられた。1935年にはロバート・マーシャルと共に、市民団体「ウィルダネス協会」を設立する。後に、この団体の活動の成果として、1964年にはウィルダネス・アクト (原生自然法) が制定されている。

彼は森林局時代から原生自然の保全を唱え、人間は自然の一部であり、土地は商品ではなく、自らも所属する共同体であることを説いた。こうした思想を著したのが『砂の国の歳時記』 (*Sand County Almanac*) で、彼の死後、1949年に出版されている。そのなかで、レオポルドは土地倫理を次のように定義する。

The Land ethic simply enlarges the boundaries of the community to include soils, waters, plants, and animals, or collectively: the land [...] In short, a land ethic changes the role of Homo sapiens from conqueror of the land-community to plain member and citizen of it. It implies respect for his fellow-members, and also respect for the community as such.<sup>6)</sup>

(土地倫理は単に共同体の概念の限界を広げ、土壌、水、植物、動物、あるいは総合的に土地を含むようにすることだ。…要するに、土地倫理はホモ・サピエンスの役割を土地共同体の征服者から、その単なる一成員、そして一市民に変える。それは仲間の成員への尊敬と共同体自体への尊敬を含意する。)

また、「人間にとって経済的利益があるかないかにかかわらず、鳥は生物の権利の問題として存続する権利がある」(p.211)と述べる。経済優先主義を批判し、共同体を個体に優先させる全体主義(holism)の立場に立つレオポルドの主張は次の「展望」に要約されている。「物事は、それが生物共同体の健全、安定、美を保つ傾向にある時は正しい。そうでなければ間違っている」(p.349)。そしてこの「展望」は今日の生物(生命)中心的な考え方の源泉となり、様々な環境問題へのアプローチとなっている。

以上のように、今日への展望を示したレオポルドであるが、彼はまた、ソーヤーやミュアアの伝統を引き、古典と現代の橋渡しの役割をも果たした。「山の身になって考える」(“Thinking Like a Mountain”)がその例である。オオカミはシカの天敵であったため、ハンターたちはシカを守るためにオオカミを撃退し、その数を減らすことが良いと考えた。だが、その結果、シカは一時的に増えたが、今度は餌が足りなくなり、餓死し始めた。オオカミが沢山いたころよりも、シカの数が減ってしまったのである。このことは生態系のバランスの重要性を示すと共に、銃弾に倒れたオオカミの目の「緑の炎」に表される野性に対する賛美を示している。

We reached the old wolf in time to watch a fierce green fire dying in her eyes. I realized then, and have known ever since, that there was something new to me in those eyes—something known only to her and to the mountain. I was young then, and full of trigger-itch ; I thought that because fewer wolves meant more deer, that no wolves would mean hunters' paradise. But after seeing the green fire die, I sensed that neither the wolf nor the mountain agreed with such a view. (p.130)

(私たちが老いたオオカミに近寄ると、獐猛な緑の炎が両方の目から消えかかっているのが見えた。私はその時に悟り、またその時以来、理解していることなのだが、あの目には私には何か新しいもの——あのオオカミと山だけにわかる何かがあるのだ。当時私は若く、引き金を引きたくてたまらなかったのだ。オオカミが減ればシカが増えることを意味するのだから、オオカミがいなければハンターの天国になると思っていた。しかし、あの緑の炎が消えるのを見て以来、私はオオカミも山もそのような考え方に同意しないと感じ取った。)

この例はローレンス・ビュエルも指摘するように、現代となつては「ボーイ・スカウト的なナイーブな自然観」<sup>7)</sup>にすぎないかもしれないが、ソローの「より高い法則」の系譜をひくものであり、先祖返りの要素と現代的要素を併せ持つ過渡期的な存在としてのレオポルドの役割の大きさを示すものである。

## 現 代

アメリカの自然保護運動に公害反対運動や生物（生命）中心主義を大きく視野にとりいれ、環境保護運動に現代的な展開を果たしたのがレイチェル・カーソン (Rachel Carson, 1907-1964年)であった。彼女は海洋学者であり作家であった。ペンシルヴァニア女子大学(現在のチャタム大学)文学部に入学し、最初は作家を志していたが、後に生物学科に転部している。その後、ウッズホ

ールとポーフォートの海洋生物研究所などで研究を続け、商務省漁業水産局に職を得ている。作家としては、『潮風の下で』(*Under the Sea Wind*, 1941)、『われらをめぐる海』(*The Sea Around Us*, 1951), 『海辺』(*The Edge of the Sea*, 1955), 『沈黙の春』(*Silent Spring*, 1962), 『センス・オブ・ワンダー』(*The Sense of Wonder*, 1965) などの作品を生み出し、いずれもベストセラーとなった。

『沈黙の春』では DDT などの殺虫剤をはじめとする科学物質による環境汚染、生態系の破壊に警鐘を鳴らした。そして、このままではやがて鳥の鳴き声が響き渡らない、春がきても自然が沈黙する禍が現実となっておそいかかる日がくることを予告した。また、水中に毒が入れば、食物連鎖の輪から輪へと渡り動いていく毒の連鎖についても次のように警告している。「この毒の連鎖は微小な植物にはじまっているように思える。そこに最初の毒が蓄積されたにちがいない。しかし、この植物連鎖の終点である人間はこうした連鎖を恐らく知らないで、釣具を支度し、クリア湖から魚を釣り上げて家へ帰り夕食のフライにする。」<sup>8)</sup>人間を含めての自然界の「相互依存の網の目」の重要性を説き、「土壌の共同体」についても、「さまざまな生物が織り合わせる網の目の糸のなかで、それぞれがなんらかの形で他のものと関係している」(p. 74) と述べる。

ノルウェーの哲学者であり活動家でもあるアーネ・ネス (Arne Naess) は 1973 年の論文でディープ・エコロジー (deep ecology) とシャロウ・エコロジー (shallow ecology) という二つの見方を提唱した。シャロウ・エコロジーは「環境汚染と資源枯渇に対する戦いであり、その中心目標は先進国の人々の健康と豊かさにある」と定義した。それに対し、ディープ・エコロジーは「自然の内に存在する人間としての経験や生態学の知識に影響を受け、強化された、規範上ないし生態系哲学 (ecophilosophy) 上の運動」と定義する。ディープ・エコロジー思想のなかで特徴的なのは、「生態系を中心とする同一化」、「生命中心主義」、「生態系中心主義」であり、人間は「生命の網 (web of life)」の一部とする。ネスはカーソンの『沈黙の春』がディープ・エコロジーをあらわしているとして、次のように述べる。

レイチェル・カーソンの強い動機は、ディープ・エコロジーに基づいていた。これは、彼女が自分自身や人間存在、そして世界をいかに直観的に考えていたかということと関連していた。要するに、宗教的動機と哲学的動機が結びついているのである。彼女は、現在我々がしているようなやり方で被造物、すなわち神の創造物を扱うことは出来ないし、それは我々自身にとっても決して良いものではないと述べている。彼女の自我は広く、深い。彼女の主な動機は宗教的、哲学的であり、狭い功利主義ではなかった。<sup>9)</sup>

人間を含めての自然界の「相互依存の網の目」は人間中心主義に対する現代の環境中心主義批評の倫理的な力の中心であるが、カーソンこそ、そのディープ・エコロジーの担い手であったといえる。また、カーソンは科学薬品による汚染が核兵器による破壊と同等の危機を人類にもたらすとし、冷戦時代における核の脅威と農業技術の進歩への懐疑を同一視した。核戦争と環境汚染によって人類は終末を迎えるとする、終末論的言説、すなわちエコロジカル・アポカリプスの要素を強調した。「相互依存の網の目」は生命の網の目から死の網の目へと変貌し、核兵器と共に人類を滅亡へと追いやるのである。ローレンス・ビュエルも『沈黙の春』は「エコロジカル・アポカリプスの文学」の始まりであると指摘し、さらに「1960年代に始まる急進的な環境的直接行動主義を鼓舞するのに重要な役割を果たした」<sup>10)</sup>と述べる。なるほどこの本はアメリカの環境運動と環境政策に大きな影響を与え、1970年のアース・デーの発端となった。また、同年、連邦政府に環境保護局が設立された。1971年には「グリーンピース」がカナダのバンクーバーでアメリカのアリューシャン列島での核実験に反対する運動体として設立されている。

ディープ・エコロジーの思想を急進的な環境主義の直接的運動と結びつけて創作活動を行ったのが、エドワード・アビー (Edward Abbey, 1927-1989年) である。アビーは1950年代ユタ州南東部にあるアーチズ国立記念物公園でレンジャー (森林監視員) として働いた。代表作『砂の楽園』 (*Desert Solitaire* :

*A Season in the Wilderness*, 1968) はその経験をもとに書かれたノンフィクションである。アビーはこの砂漠の地では彼自身を含めてすべてのものが相互依存の網の目のなかで、一つの生態系を構成していることを知り、「地上のすべての生物はすべて兄弟である」<sup>11)</sup>と語る。このような近代産業社会批判に加え、生命中心主義的ディープ・エコロジーの思想を急進的な環境主義の運動として描いたのが『モンキーレンチ・ギャング』(*The Monkey Wrench Gang*, 1975) である。急進的な環境主義の運動とは、モンキーレンチング、エコタージュ(エコロジー+サボタージュ)、座り込み、ゲリラ、デモといった直接行動を戦術とする運動形態である。モンキーレンチング(抗議として破壊・妨害する)という言葉はこの小説を起源に生まれた。そしてこの小説が大きな影響を及ぼすことによって出来た急進的な環境運動を行う団体が「アース・ファースト」であり、1980年に創設されている。アビー自身、1981年にアース・ファーストのメンバーと共に、グレン・キャニオン・ダムに「モンキー・レンチング」を行い、黒いプラスチック・シートをダムの壁面に垂らしてダムにひびを入れたように、それによって川が解き放たれたかのように見せかける運動を行っている。その他急進的な環境主義の直接的な運動には森林伐採設備や石油探査設備に対する妨害行為がある。

こうした巨大資本による開発に反対し、私有財産を犯す行為は、しばしばテロリズムとして受け取られたが、それに対してアビーは1984年のインタビューで次のように語っている。

私はサボタージュとテロリズムをはっきりと区別しようとしてきた。私の「モンキー・レンチャー」は、サボタージュをする人であり、テロリストではない。サボタージュとは無生物、すなわち機械や財産に対する暴力である。テロリズムは人間に対する暴力である。普通、テロリズムは軍隊と国家によって行われているが、無法の個人と呼んでよいような人びとによって行われる場合もあり、どちらの場合についても、私はテロリズムには絶対に反対する。<sup>12)</sup>

アビーの思想は確かに過激な行動を生み出したが、それは人間には危害を加えないという大きな原則のもとであった。

アース・ファーストの指導者デーブ・フォアマン (Dave Foreman) は「アメリカの初期の自然保護運動は支配階級の子供であった」<sup>13)</sup>と書いているが、なるほど初期の自然環境保護運動は教養のある中流以上の白人の手によって推進されてきた。だが、自然というものの言わぬ弱者の権利の保護、そして自然の解放の思想と運動は当然、労働者階級、マイノリティ、女性といった弱者の権利の保護と彼らの解放の思想や運動と結びついた。そして彼らもまた草の根レベルで運動するようになり、最近では「環境人種差別」や「環境正義」という言葉が環境運動や環境政策のキーワードになってきている。白人以外の少数民族や低所得層は、環境問題においても差別され、ゴミ処理や公衆衛生、産業公害や自動車排気ガス等の面で劣悪な住宅環境にある。大規模な有害廃棄物の処理場は、アフリカ系、ヒスパニック系、先住民の居住地に立地される傾向があったり、ウラン開発ではウラン鉱山の多くが先住民保留地に存在していたので、鉱山労働者として先住民が多く雇用されたりした。放射性廃棄物の規制が十分でなかった時代には、住居地での被曝も多く、現在でもナバホ族の癌の発生率は全国平均の17倍もあるという。このような「環境人種差別」を是正する理念を「環境正義」と呼んでいる。この運動は1960年代の公民権運動の発展したものとして、とりわけ1980年以降、盛んになってきている。草の根レベルの運動は「自分の近所だけは困る (not in my back yard)」いわゆるNIMBY主義として、地域エゴ的な浅いエコロジーとして批判される面もあるが、公衆衛生をはじめ、全体の福祉に建設的な貢献をしていることも確かである。そして、地域エゴを超えた「だれの近所でも困る (not in anyone's back yard)」というNIABY主義にもとづく、視野の広がりを見せている。

環境正義運動はマイノリティー作家による都市のスラム街の描写に例をとることが出来る。アフリカ系アメリカ人作家ジョン・ワイドマン (John Wideman, 1941-) は幼少時代をすごしたピッツバーグのホームウッド (Homewood) 地区への帰還をホームウッド三部作に描く。実人生においてワ



イドマンは弟ロビー (Robby) が殺人を犯し終身刑になるという家庭の悲劇の十字架を背負うが、そうした家庭の悲劇や幼少の記憶をもとに作品は生み出されている。そのうちの一つ、『隠れ場所』(Hiding Place, 1981) では家族の元祖である Sybela Owens が奴隷の身を逃れて住み着いたホームウッドが今は孫のベス (Bess) が住み、犯罪を犯した Tommy が身を隠す場所として描かれる。文字通り、麻薬、貧困、暴力、犯罪の巣としての都市のゲットーである。そこは腐敗した場所ではあるが、服役中の Tommy は独房の中でホームウッドの街路を次のように夢見る。

He kept the streets inside him. Even though they were full of broken glass, and cracks, the garbage stacked at the curbs and boards over the empty windows and iron cages over the windows with anything in them, and black stones still smelling of smoke, still smelling of dead winos and dead firemen in the vacant lot after they tried to burn down the streets one hot August night. Even though he left little bloody pieces of himself scattered all over the streets, he kept the dream. Frozen storefronts and frozen faces and music frozen in the darkness of his cell.<sup>14)</sup>

(彼は心の中に街路を描いた。もっとも街路には壊れたガラスが散らばり、亀裂が走り、ゴミが縁石のところで積み重なり、空っぽの窓の上の柵、そして窓の上の鉄の獄舎、そしていまだ煙の臭いのする黒い石、ある暑い8月の夜に通りを焼き払おうとしたあとには、死んだアル中や死んだ消防士のにおいが空き地で臭ったけれども。小さな血まみれの彼の肉体の破片を街路にばらまいたままであったが、彼は夢をみた。独房の暗闇の中での凍った店頭、凍った顔、そして凍った音楽。)

それは、一旦は乱用され、軽視され、嫌悪された場所の記憶の中での回復である。環境正義の運動を行うには、それ以上のものが必要とされるであろうが、そうした想像力上の回復がなければいかなる場所も取り戻すことは不可能であ

る。ワイドマン自身、都市のゲッターを嫌悪し、ワイオミングの自然にあこがれ、ワイオミング大学で教授の職についたり、初期の作品においては都市のゲッターを抜け出しアイビー・リーグの大学へ奨学金を獲得して進学する成功物語を描いたりしたが、彼の心には払拭し難いゲッターへの愛着があったように思われる。

最後に女性の解放と自然の解放の関連について考察してみよう。自然破壊による搾取と女性に対する抑圧の類似性から、フェミニズムと環境主義は相互の支えとなって結びつきエコフェミニズムと呼ばれる主義主張を生み出した。この類似の中心にあるものは、「女性的で慈しみ深く受動的な存在としての自然環境のイメージである」<sup>15)</sup>とロデリック・ナッシュ (Roderick F. Nash) も指摘する。こうしたエコフェミニズム的視点を持った作品としてはテリー・テンペスト・ウィリアムス (Terry Tempest Williams, 1955-) の『鳥と砂漠と湖と』 (*Refuge: An Unnatural History of Family and Place*, 1991) がある。原題の「レフュージ」は「鳥獣保護区」という意味であるが、邦訳はこの題で出版されている。またウィリアムス自身、この作品を「クリエイティブ・ノンフィクション」と呼び、独自のジャンル性を打ち出している。したがって作品の語り手「私」とはウィリアムス自身を重ねた創造上の人物と考えられる。その「私」の住むユタ州ソルトレイクシティはモルモン教の聖地、渡り鳥の飛来地、そしてネヴァダ核実験場の風下地域である。ところがその郊外にあるグレートソルトレイクが異常増水し、河畔の湿原ベア川鳥獣保護区が浸水し始めるのと時期を同じくし、母の乳がんが再発し、「私」にとっては二重の意味での喪失の危機に襲われる。本書は核実験場の立ち入り禁止区域に抗議デモをする政治的主張の書であると同時に、湖の水をポンプで砂漠に汲みだそうとするモルモニズムと州政府の不自然な父権的体質への抗議の書でもある。「私」は湖と女性としての自身を同一視し、次のように述べる。

I want to see the lake as Woman, as myself, in her refusal to be tamed.

The State of Utah may try to dike her, divert her waters, build roads across her

shores, but ultimately, it won't matter. She will survive us. I recognize her as a wilderness, raw and self-defined. Great Salt Lake strips me of contrivances and conditioning, saying, "I am not what you see. Question me. Stand by your own impressions."<sup>16)</sup>

(私は湖を飼いならされることを拒否する私自身として見てみたい。ユタ州は彼女に溝を設けて排水し、水を迂回させ、岸辺に道路を建設しようとするかもしれないが、結局は問題ではない。彼女は生き残るだろう。私は彼女を粗野で自らが定義した荒野だと認める。グレイトソルトレイクは私からもくろみと調和を奪い、「私はあなたが見ているものとはちがう。私に疑義を唱えよ。あなた自身の印象にたよりなさい」と言う。)

また第一章では「女性の身体と地球の身体は採掘されてきた」(p.10)とし、土地に加えられる開発の暴力と女性への暴力が同一視されている。以上のように、自然の解放は黒人や女性といった弱者／他者への共感とその解放と結びついて、生物中心主義の思想と共に民主主義的世界観を提示していると言える。

## お わ り に

以上、アメリカの環境主義と環境的想像力について歴史的な考察を行ってきた。本論で論じなかった事柄として、アメリカ原住民の環境主義とその文学、そして東洋の宗教や神秘主義がある。アメリカの環境主義は人間中心主義から生命中心主義へ向かい、また自然の解放は女性やマイノリティの解放とも結びつき、民主主義の理念を実現に向けて進んでいるが、そこには東洋思想や原住民の思想が内包されるのである。環境問題を論じる時、しばしばキリスト教が批判される。それは、キリスト教が自然に対する人間優位の思想を説くからである。リン・ホワイト (Lynn White) は1967年、「自然は人間に仕える以外に存在理由がないとするキリスト教の原理を我々が否定するまでは環境危機は悪化し続けるであろう」<sup>17)</sup>と批判し、ジョン・パスモア (John Passmore) は1974

年、「自然に対して東洋の宗教（インディアンの宗教も）は調和を求めが、西洋は逆だ」<sup>18)</sup>と主張した。しかし、民主主義はキリスト教の理念でもあり、キリスト教の立場からの環境倫理の研究も増えている。また、自然破壊が東洋より西洋において進んでいるといったこともない。エマソン、ソロー、ミューアは共に東洋思想に傾倒しながらも、キリスト教を基盤としていた。生態学は人間の限界を知らせたが、神も人間の限界を知らせたのである。アメリカの環境主義はアメリカの前提である民主主義を実現すべく、その思想的、哲学的根拠としての環境的想像力をバック・ボーンとして今後も展開していくと思われる。

## 註

一次文献の長い引用は原文を示した。また、参考文献からの引用の訳はすべて拙訳である。

- 1) Ralph Waldo Emerson, "The Transcendentalist," *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson* (New York: The Modern Library, 1992), p. 86. 以下、エマソンからの引用はすべてこの版からであり、ページ数は括弧内に示す。
- 2) Henry David Thoreau, *Walden, A Norton Critical Edition* (New York: W.W. Norton & Company, 1992), p. 61. 以下、*Walden* からの引用はすべてこの版からであり、ページ数は括弧内に示す。
- 3) John Muir, *My First Summer in the Sierra, Nature Writings* (New York: Literary Classics of the United States, 1997), p. 298. 以下、*My First Summer in the Sierra* からの引用はすべてこの版からであり、ページ数は括弧内に示す。
- 4) Linnie Marsh Wolf, ed. *John of the Mountains: The Unpublished Journals of John Muir* (Madison: University of Wisconsin Press, 1979), pp. 79-80.
- 5) Thomas J. Lyon, ed. *This Incomparable Land: A Book of American Nature Writing* (Boston, Houghton Mifflin Company, 1989), p. 59.
- 6) Aldo Leopold, *A Sand County Almanac* (New York: Oxford University Press, 1989), p. 204. 以下、*A Sand County Almanac* からの引用はすべてこの版からであり、ページ数は括弧内に示す。
- 7) Lawrence Buell, *Writing for the Endangered World* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap

- Press of Harvard University Press, 2001), p. 184.
- 8) Rachel Carson, *Silent Spring* (New York: Houghton Mifflin, 2002), pp. 48-49. 以下, *Silent Spring* からの引用はすべてこの版からであり, ページ数は括弧内に示す。
  - 9) Arne Naess, *Ecology and ethics*, Unpublished manuscript (University of Oslo, 1989), p. 7. Ripley E. Dunlop and Angela G. Mertig, eds. *American Environmentalism: The U.S. Environmental Movement, 1970-1990* (Washington DC: Taylor & Francis, 1991), p. 52 に引用されている。
  - 10) Lawrence Buell, *The Environmental Imagination* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1995), p. 285.
  - 11) Edward Abbey, *Desert Solitaire* (New York: Ballantine Books, 1968), p. 24.
  - 12) Edward Abbey, The plowboy interview: Slowing the industrialization of Planet Earth, *Mother Earth News*, May/June, 1984, p. 18.
  - 13) Quoted in Roderick F. Nash, *The Rights of Nature: A History of Environmental Ethics* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1989), p. 190.
  - 14) John Edgar Wideman, *Hiding Place* (New York: A Mariner Book, Houghton Mifflin Company), pp. 113-114.
  - 15) Roderick F. Nash, *The Rights of Nature*, p. 144.
  - 16) Terry Tempest Williams, *Refuge: An Unnatural History of Family and Place* (New York: Vintage Books, 2001), p. 92. 以下 *Refuge* からの引用はすべてこの版からであり, ページ数は括弧内に示す。
  - 17) Lynn White, “The Historical Roots of our Ecologic Crisis.” Carolyn Merchant, *Reinventing Eden: The Fate of Nature in Western Culture* (New York: Routledge, 2004), p. 5 に引用されている。
  - 18) 岡島成行著, 『アメリカの環境保護運動』(岩波書店, 2000年), p. 141 に引用されている。